

GR
白雲郷

とり
お

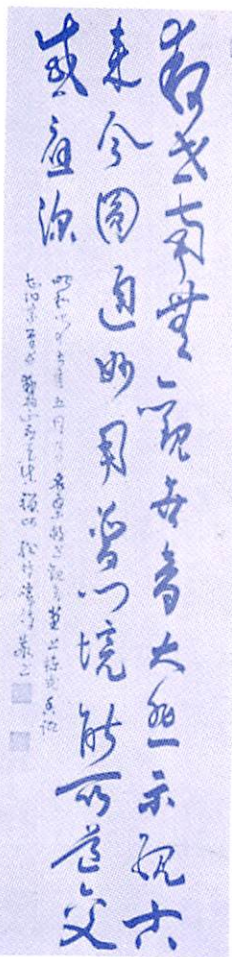


20

救世大観音落慶記念號

昭和46年10月1日

軸掛語香下貌本岩



この掛軸は昨年救世観音上棟式の折り岩本勝俊貌下の香語を染筆したものです。
救世南無観世音

大悲示現古來今

円通妙用普門境

能所道交感応深

苦悩の多いこの世、御救い主は、外ならぬ 南無観世音菩薩さまでおいでになります。

その広大な お慈悲の世を救うおはたらきは昔からこのかた、人の世の光りとして示され 尊いことでもあります。

その円満無比のお徳に依る大神通力のおはたらきは、毫も好悪選別のあろう筈なく、へだてない慈悲行として行われています。そこには、お慈悲を垂れる観音様とお救い頂く衆生の私どもとの間に、わけへだての無い状態とさえ成りまして、自他平等の両者一体不二の妙境となつて仕舞います。

観音様の御心が私共に通じ、私共の心が観音様に通じ、心と心が相共鳴する有難い世界が現出する事となります。

いよいよ観世音さまを身近どころか、同体一心に拝むことが出来る幸せを欣ばずに居られません。



目次 (とりゐ十月号) …… (1)

表紙 白雲山救世大観音

桐江筆

表紙裏 岩本勝俊猥下の書

救世大観音落慶記念号発行について …… 桐江 (2)

救世大観音落慶に際して …… 沢田政広 (4)

印度附近の旅路 …… (其一〇) 桐江 (5)

道光禪師(故高階瓏仙猥下)御法話瓏仙いかだ集より(其三) …… (11)

西遊記 …… (其一五) 岡部千三 (15)

……救世大観音落慶を祝して御芳名 …… (十六頁) ……

老万体小観音奉安者ご芳名と秋の紅葉と行事 …… (20)

老万体観音奉安申込書 …… (22)

終った夏の行事と来山者 …… (23)

裏表紙の内面、救世大観音への案内図 外面、行事のお知らせ



白雲山境内に建立された救世観音は、昭和四十三年七月吉日を選んで、起工式を挙行し、三信工業により工事が進められて、丁度三年余を費して完成しまして、来る十一月十一日、曹洞宗管長、岩本勝俊親下に、お導師をお願いして開眼、落慶式を挙行する迄となり、今その準備を急いでおります。

何しろ高さ十米の堂宇の屋上に、二十四米の大観音をお乗せしたのですから、台風、地震に耐え得るように設計するため、今津技師等は、非常な苦心でした。

又この設計はインド、中近東の建築様式と、日本寺院の様式とを融合させるために色々無理があります。

たとえば玄関を、日本式でなく、ギリシャ式にしましたのは「ステンドグラス」を生かすように、玄関の屋根を低くしたい為であります。

堂宇外壁には、沢田政広先生作の観音三十三応身のレリーフを取りつけ、

其の屋上の四方には二・五米の四天王を御乗せしたり、正面玄関の両横に仁王尊を安置したのも、このギャップをやわらげたいためであります。

この仁王尊は、佐野友二様の寄進されたもので、徳川初期のもののようにですが、なかなかよい味を持っております。

救世大観音は堂宇内に陳列してある石膏の十三尺五寸の原型を、粘土で六倍に引き延ばしたのですが、ブロックで積み上げるといふ今迄の建築法よりも線がよく出ており、美しく見えます。

堂宇内部中央から大観音の見晴台迄登るまわり階段も、奥正面の阿弥陀如来を、おがむのに、邪魔だと思いましたが、時代感覚が出ていると思えます。

内部両横の大天蓋（二・六米）は、内面に鏡を張り、イランにて買いた美しい灯籠を、真中に吊るす等、奇



抜なものです、この変わった堂宇には返ってしっくりしたように思います。

一万余観音も、各方面の非常なご支援のおかげをもちまして、七千百余体のご奉納がありました。この小観音には、皆様のご先祖様のご霊位を記入して壁面に奉安し始めましたところ、お堂内に一段と光彩を放ち、崇高にして充実感に溢れており、有縁の方々の中広い霊場となりました事は、実に有難い事と思えます。

ご覧の通り五百余米もある山の上に建立致しましたので、風の強い日や、寒中等は工事も危険で思うようには仕事も出来ず請負者は、非常な苦心をされましたが、幸い事故もなく、落慶式を挙行する運びとなりましたことは、ひとえに大慈大悲の観世音菩薩の有難いご庇護と、有縁の皆様の大なるご援助の賜と、感激に堪えません。衷心より御礼申し上げます。

殊に「とりゐ」落慶記念号に、沢山

の祝賀の御芳名を頂戴し一段と光彩をそえて頂きまして、有難うございました。

不肖私はこの落慶式前にエンマ様のお迎えがある事と内心思っておりましたところ馬齢を重ねまして本年竜門社より、八十才の「寿杖」を頂戴しましたので、いよいよ翁と云う字を憚る事なく書く事が出来るようになり、相変わらず、こつこつと彫刻に精進致しております。

そして此の度の落慶式の折には、絶大なご支援に預りました皆様にお目にかかれまことを楽しみに致しております。

是も観音様の廣大無辺の御慈悲と、皆様のご鞭撻のおかげと存じ、感謝に堪えず、茲に重ねて謹んで御礼を申し上げます。

合掌



救世大観音落慶に際して

沢田 政広

平沼弥太郎先生の念願である、近代仏教美術としての
仏像建立が何時から始められた事かは、私も知らない
ことでもあります。

始め私の兄弟^{あでし}弟子の三木宗策先生の所で、手ほどきを受
け、聖観音と脇立ちの三尊を作られつづいて一丈余
の、仁王尊を製作する事になり、三木先生の指導の
もとに始められたようでありましたが、漸く荒刻りも終
り、これから仕上げに取りかかろうとした時戦争で郷
里に、疎開中の三木先生が、なくなりました。平沼
先生も参議員と、銀行の頭取等、多忙で途方にくれ、
平沼先生御夫妻が私の所に見えられて、是非作品を見
て、仁王尊の仕上げをやってくれとの事でありました
が、まだ未熟の私ではどうかと思いましたが、先輩の
三木先生のやった事でありましたので、ついにお引受
けする事に致しました。それは二十二年前の昭和二十
四年、私の五十四才の時だったと思います。

だんだん仕事を進めてみますと、どうもその仁王尊
が平沼先生の手ひとつで専門家の手をあまりわずらわ

せずに、これまで作り上げられた事がわかりました。
全くの素人としての平沼先生が、この一丈余りの仁王
様にいどみ、これ迄に仁王尊の形を刻み出された技量
と熱意には、全く頭のさがる気持が致しました。

芸術と云うものは決して技巧が秀れているとか、単
に形がとれて居るとかではありません。技はにぶくと
も、其の中に心があるか、ないかの問題です。

此の像はがっちりと大地をふんまえて、立派に彫刻
としての姿をそなえた近代の傑作であります。

其の後つぎつぎと建てられて行く山上の寺仏の姿は
ただ驚嘆するのほかありません。今後、おそらく、
平沼先生の生命のつづく限り、この地上に、仏の姿が
きざまれ天上から散華がつづくことでありましょう。
三年前平沼先生が救世観音の設計図を持って来られ
て、ご相談を受けたが、其の構想を伺うと、世界寺院
の特長を取り入れた独想的なもので、其のアイデアに
は感心しました。私もその堂宇の外壁に観音三十三庇
身の図のレリーフ十六枚を製作して取りつけられてあ
ります。此の救世観音も来る十一月には開眼落慶式が
取り行なわれる事になったのは、お目出度い事です。
定めし現代的な、面白いものが出来上った事だろう
と、拝見するのを楽しみに致して居ります。



印度附近の旅路

(其の十) 桐江

サンチーの魅力

印度仏教の四大聖地と云われるルンビニー（釈迦降誕）、プタガヤ（成道）、鹿野苑（初転法輪）、クシナガラ（涅槃）等は、印度の北部にありますので、仏教徒は必ず之を巡拝して居られますが、印度中部のデカン高原附近は数百年の間最も仏教の盛んな処で、仏跡も多いのですが、此所迄足を延す人は少ないようです。私も始めてのため興味深いものであります。

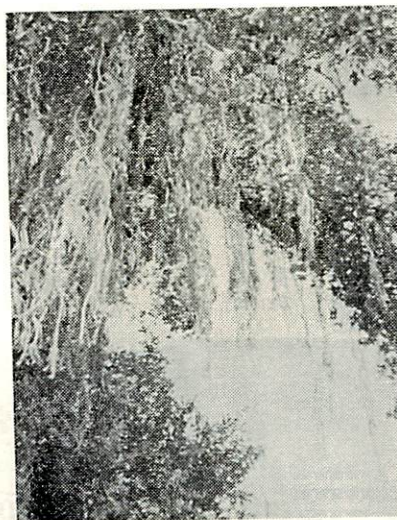
又饅頭形の仏舍利塔は所々に沢山見受けませんが、サンチーの仏舍利塔のように四方に聳え立って居る四個の優美で壮麗な塔門は始めてで、あまりの美しさに低徊する能はずの心境で見えておりましたが、団体の関係上、後髪を引かるる気もちで、自動車に分乗して来た道をポパール市の天国のような美しい湖畔の、インペリアルサプル・ホテルに投宿し、緊張した心をいやしました。

ボンベイの病院にて

十一月十六日、飛行機で、印度の玄関と云われる人口五百余万の大都市ボンベイに飛び、直ちに、自動車事故の私と友人は、インド一と言われる設備のよい大病院で診察を受けた事は、前号に記載した通りで、そのためボンベイの市内見物は出来ませんでした。

デカン高原の旅

十一月十七日早朝ボンベイの飛行場に行き、一時間余り東方に飛び、オーランガバットと云う古都に着、



バーニアンツリー（枝から根が沢山ぶら下がっている）

直ちに自動車で、デカン高原をエローラの岩窟寺院に向いました。

相変わらずあわれな貧民窟の点在している高原をつらぬく車道の両側には、枝から沢山の根が垂れ下がっている、バーニアンツリーの大木や、シャボテンの群生とか椰子の林等、実に珍らしく、熱帯ならではの見られぬ情景で二時間半の道もまたたく間に過ぎてしまいました。

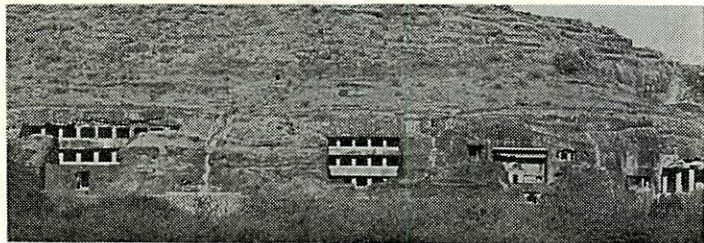
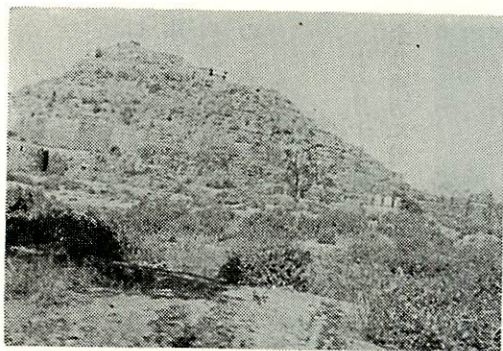
左側に五百米位ある岩山のまわりを切り立ったようにけずりとり、岩穴や周囲に深い堀をめぐらした、オーランガバット王の築いた魔物のような岩窟城が突兀として、そそり立って往時の情景が強く私共にせまってくるように感じました。

この城を眺める台地の大木の木蔭で、土民が松傘のような果物を売っておりました。形が仏頭に似ているので、(釈迦頭)カスタードアップルと云う名です。アケビに似たような野生的な味で、親しみがあり忘れられません。日本のデパートにも冷凍したものが出て居ったので味わってみました。原地で食べたのとは大分味が落ちます。

仏教岩窟寺院

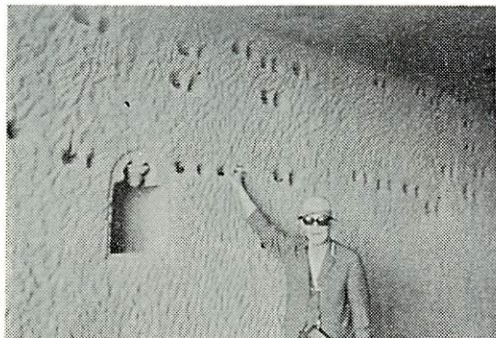
自動車を下りると眼前に溶岩で出来た、大岩壁が二キロ半に涉って、三十四のエローラ大洞窟が整然と展開している様には一同アッと噴声をあげました。

エローラは三つの宗派の石窟があります。そして一番か



↑ 魔物のような岩窟城
→ 仏教岩窟寺院

岩壁に馬をつないだ穴



を繋ぐための穴が岩壁に沢山彫られてあったのも印象的でした。

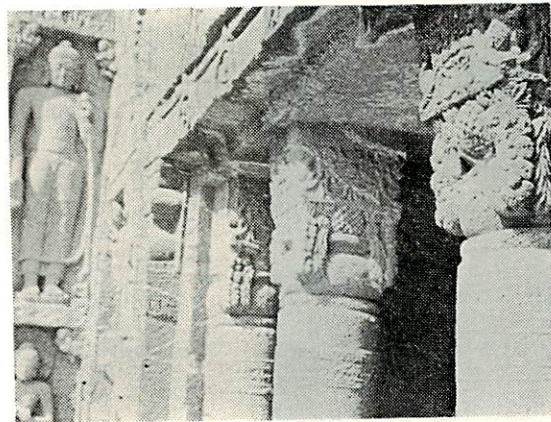
然しこのデカン高原の地区で数百年の間殷盛を極めた仏教もヒンズー教の圧迫や仏教の墮落、其の他色々の原因で七世紀頃には全く衰退して、僧侶は地上から姿が消えてしまったとのことでした。

ら順に仏教窟院が十二カ所並んで居ります。仏教の石窟は僧房が多く、中には千人も集合出来る洞窟もあります。併し禮拜堂もなかなかよく出来ており、仏像も沢山彫られておりますが、ヒンズー教に比し簡素な感が致します。そして岩質がよいのでよく保存されております。

或る洞窟の入口に馬

ヒンズー教とジャイナ教の石窟

ジャイナ教やヒンズー教の石窟は仏教が衰退した後、七百年の間に仏教洞窟と成らんで二十カ所出来たが、仏教洞窟よりも規模も大きく絢爛たるもので、建築と彫刻が一体となっておる一大芸術品と云えましよう。



仏教寺院入口の柱

そこにはヒンズー教の伝説があきれる程、彫刻してあります。たとえば、ヤクシ神が、人間の腹を裂いている所とか、猿王が魔王を退治している所とか……、

又シバの神が悪魔を剣を以て空中で刺殺し、其の血が地面につくと生れ変わるので其の血を大きな皿で受けて居るとか、其の他神々の偉大な法力の有様の図がらを無数に彫み込んで居ります。

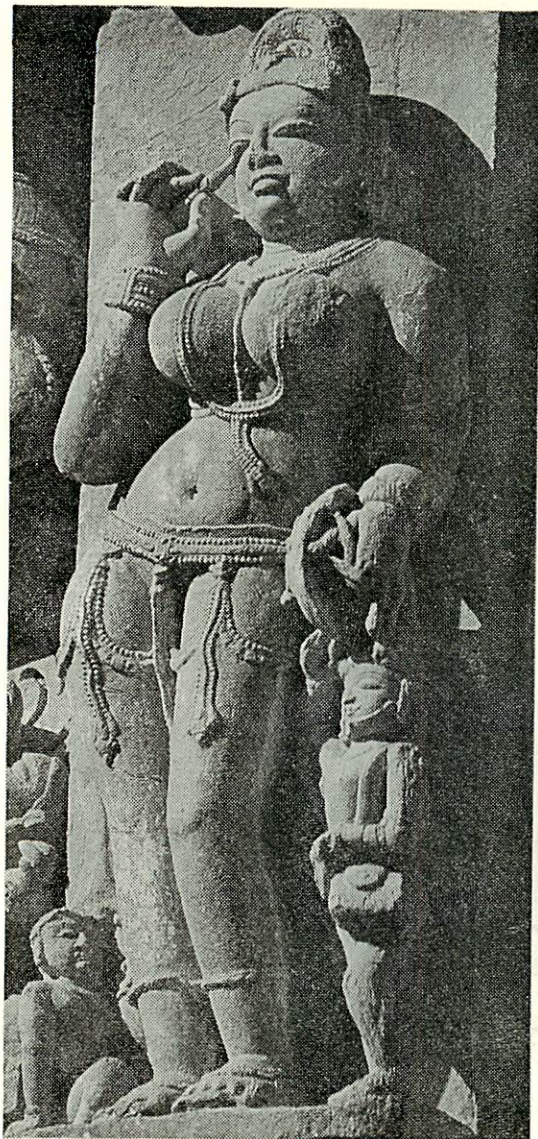
其の彫刻は官能的で且つ肉感的ポリュームがあり、優秀な作品で大衆を引きつけ、信仰へ導く、偉大なる力を發揮して居ります。

殊にジャイナ教の男女愛の彫刻は印度ならではと思われませう。

印度婦人の目は大きく又魅力的である上に、臉の化粧（アイシャード）をしている彫刻もあります。

之は今、日本でもよく見受けるようになりました。

第十六窟の偉大なカイラーサナータ寺



眼を化粧する婦人

其の中でも第十六窟(カイラーサナータ寺)は驚くべき建築様式であり、且つ雄大精緻なものであります。

この建築様式はヒンズーの神の住し給うと云う、ヒマラヤの神域を取り入れたものだとのことです。

この第十六窟は大岩塊を上の方から百米も掘り下げたものです。即ち上方から三階、二階、一階と、漸次下に掘り下げて、奥行百米もありまして、地上から造ったよりも、見事に出来上っています。

そしてその中庭には四十米もあるミナレーヤ、長さ六米もある巨大な象が岩から彫り出されてあります。

そして尚、庭の四方の岩壁には、僧房や廻廊がとりまき、中央神殿の間は橋でつながっており、複雑で写真の撮りようもない位です。

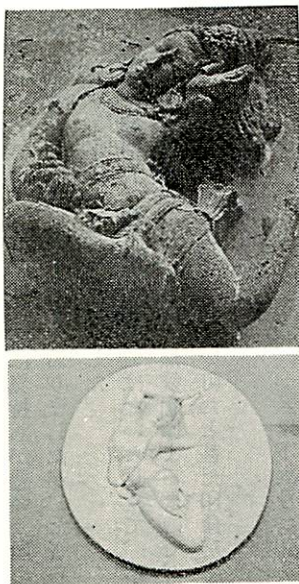
奥殿中央には、ヒンズー教独特の巨大な「リング」が祭られてあります。

殿堂の内外は一面に見事な彫刻にうずめつくされて、大芸術品であると言ふも敢て過言ではありませぬ。完成には百五十七年を要したとのことです。

日本とインドの石彫の差異

日本では良質の岩がないため、石彫は少ないのです。併し九州の北部、殊に大分県の臼杵附近の石仏は千

飛天と桐江作(船橋ヘルスセンターと庫裡にある)



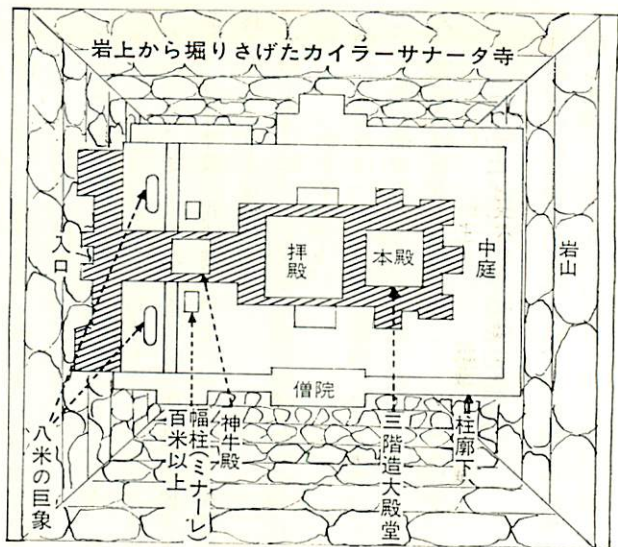
年以上のものもあり、規模も雄大です。

只、石質が柔らかいため彫刻し易いので、木彫師の彫刻したものであると言われる位で風化も甚だしいものです。中には内部が風化して表面の漆だけが残っているものもあります。

臼杵にも色々と伝説の興味深いものがありますが略させていただきます。

これに比し、インドには木彫が少ないが、良質で彫刻しやすい岩が多いため、石彫が発達し、湿気がないので風化もありません。

インドには石窟寺は千数カ所もありますが、其の七割は此の中部のデカン高原にありまして、大国だけに其の規模も雄大であります。



岩の頂上から掘り下げたカイラーサナータ寺（平面図）

オーランガバット市

エラーラをあとに、オーランガバットに行き、プーレホテルに宿泊しました。

時間がありませんでしたので市内見物に出かけました。大学の都だけに、学生が町中に溢れております。

そして吾々日本人を見ると愛嬌たっぷりな話しかけ、最後にポールペンをくれの何をくれのとねだります。握手する

と油でニチャニチャしており実に気持ちが悪い。始めは、親善のためと、握手をしておりましたが、たまたま、逃げてまわるようになりました。

又町の商店も、観光客が相手ではないと見えて、珍らしいものを買おうとしても、無愛想極まるもので、観光熱の盛んな、今時、珍らしい町だと甚だ印象が悪く、何も買わずに帰りました。

（以下次号）



大分県白杵石仏像



道光禪師（故高階瓏仙貌下）

御法話（瓏仙いかた集より）

（其三）

（九）生きることに、食べることに（後半）

前号では、人が生存する上に必要な食物を、仏教では、四食に分け、第一の段食について申上げました。

次に第二の触食しじきとは、対触の食といい、主観が客観に対して段食——あらゆる種類の食物——をとることを忘れていても、空腹を感じず、触感の力で生命を支えていることをいいます。面白いものに見入ったり、苦しいことや悲しいことに出合ったとき、食事をぬかしても、気力を保っているのは、外界への対触が、その人の「食」となっているわけです。

第三の思食しじきとは、意思の力のことで、思い込んだり、考えこむような時、思考することが気力を支えるため、食事をぬかしても平気のことをいいます。

終りの識食しじきといえますのは、認識とか意識するとかいう、心識作用の根本を第八識といいますが、寿命を支える根本でして、人を活かす力があるといえます。

以上四食は、肉体生活を資持するものですが、一方

に精神生活があります。その生活を資持する食力となるのは、いろいろありますが、もつとも滋養となるものは宗教です。宗教は人の精神を救い、力づけるものです、が宗教ならどんなものでもと盲目的に取入れますと、思想中毒を起します故、正しく選びましょう。

（一〇）涅槃会と戒徳

大聖釈迦牟尼世尊が、涅槃会だんぜんかいに入られたのは、二月十五日で、涅槃会には各寺にて法要をいとなみます。

涅槃とは、寂滅じやくめつまたは円寂と訳されて居りまして、二種あります。有余涅槃とは修行により、煩惱を断ちつくして、寂滅解脱した有漏うろうろ（迷い）の身、即ち肉体のある涅槃のこと。無余涅槃とは、さらに生命のなくなった円満な死、即ち円寂されたときの涅槃です。

さて釈尊がおなくなりになるとき、弟子に与えられた遺言のお誡いさめを「仏垂般涅槃略説教誡経」といい、略して「仏遺教経」と申し、其の一節に

『人よく淨戒を持すれば善法あり。淨戒なければ諸善の功德生ぜず。戒は第一安穩功德の所住所たることを知るべし』とあり、誰もが戒法を厳守せねばならぬとのご垂訓です。曹洞宗（禪宗）の戒法は多くありますが、総括して申し上げますと、

諸惡莫作 修善奉行 自淨其意 是諸仏教

の四句で言い現しています。即ち悪いことはするな、善いことは行なえ、心を清浄にしなされ、という戒の根本精神です。身からだと口くちと心の三つを清浄にすることを形にあらわすと坐禪です。禪戒一致を説くゆえんもここにあります。

身口意の三業（業とは善悪一切の作業）が清浄なれば、仏の世界に入れると教えています。

曹洞宗の開祖永平道元禪師さまは、大清規の中に、「寮中の儀まさに仏祖の戒律に敬遵し、大小乗のお示しなされています。故に吾々は、道元禪師さまのご教示を行持し、宗風を発揚し、釈尊の遺教を守って報恩謝徳のご奉公をつとめねばなりません。

誠まことは、天及び人の道にして、誠心まことこころは戒法より生ずる真心まことこころであつて、この戒徳こそわれわれの生命です。お互に受けがたき人身を受け、其上仏さまの教えを知ることは、ありがたいことです。三千年のむかし、大聖釈尊は、二月十五日沙羅雙樹さらそうじゆの下にて、無余涅槃に入りたまえけるも、われわれが仏戒を守り、み教えを日夜、恭敬すれば、尊い涅槃の釈尊像を心眼でおがみ奉ることが出来ます。

(十一) 尊ぶべき命

高祖道元禪師のお言葉に、得難き人としての生を受け、更に値あいがたい仏法を知り得たわれわれは、実に良い生まれ合わせであると申されました。

「人身得ること難し、仏法値うこと稀まれなり、今我等宿善しゆくぜんの助くるによりて、既に受け難き人身を受けたるのみに非ず、遇あい難き仏法に値あい奉れり。生死の中の善生最勝の生なるべし」 更に加えて

「この一日の身命は、尊ぶべき身命なり、貴ぶべきからだなり。この行持あらん身心自らも愛し、敬うべし」と教えられている故に、価値ある自己をいたずらに損傷してはなりません。尊い人身を自覚し、修養と感謝の心が肝要です。更に外国をまわつて見て、しみじみ感じたことは、恵まれた風土の日本に生れ合せて幸しあせや尊さであります。

道元禪師は、

「その報謝は………：日日の生命を等閑とんがにせず、私に費さざらんと行持するなり」とお訓しになりました。社会国家の平和のためを思つて、毎日の生命を大切にしてい報恩の行となるように努力して下さい。

(十二) 汝が心を折伏とくすべし

釈迦牟尼世尊が仏弟子に説かれた遺教経の中で、五根と心とを誡めなされたなかの最後の一句が「汝が心

救世大觀 音の落慶

住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名
名栗村	崎玉銀行 名栗支店	深谷市	持田高良	羽生市	堀越一郎
大阪市	同節子 <small>大阪いすゞ自動車</small>	大阪市	牧瀬幸吉	青梅市	並木金一郎
千代田区	杉山慎	東光電気工事(株)	東光電気工事(株)	桜田久	松本福男
"	中村実	"	与野敏夫	"	小川孝重
"	西村博吉	"	西川博彦	"	谷本慶隆
住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名
吉野賢一	杉山守	石井竜雄	石塚格	菊地諫雄	横山昭司
河野宗治	玉田勝太郎	上田丈夫	藤卷正雄	川島孝	鈴木国仁
北見晃	南雲留男	大友寿	"	"	"
千代田区	"	"	"	"	"
周防栄三	真木常次	竹本勝栄	木本幹夫	田島盛雄	樋口孝一
富田信	小川正三	高木武	坂江満寿造	山本泉	岡野信一
竹内保	金子芳雄	中坪泰雄	"	"	"

救世大観 音の落慶

〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	浦和市	〃	〃	〃	千代田区	港 区	〃	〃	千代田区
高木菊蔵	堀込聡夫	大木恒四郎	常務 福原 弘	北島太郎	専務 矢島武久	副頭取 松平忠晃	頭取 長島恭助	会長 石坂泰三	柳田省一 柳崎玉銀行	原口良英	夏原喜三郎	菊池 仁 高萩炭礦	菊池 仁	片倉チツカリン 社長 鷺見保佑	鶴見重男
新座町	八王子市	横浜市	〃	〃	鎌倉市	〃	世田谷区	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
宇野光子	阿部末吉	松本祐子	岩水てる子	鬼よし子	上野貞亮	小林義和	平沼 浄	〃 松本弘道	〃 熊谷 保	〃 持木 豊	〃 相島 斌	〃 新藤義雄	〃 持田高良	取締役 松本五良策	〃 尼崎謙一
練馬区	杉並区	新宿区	〃	〃	〃	三鷹市	〃	練馬区	練馬区	目黒区	〃	鎌倉市	〃	〃	練馬区
練馬鳥居観音講	横山高輝	山口直平	渡辺雅子	渡辺 豊	渡辺 暉	渡辺 八重	森田 準一	平沼 精一	津吉 秀世	相沢 良昭	宮田 慈郎	相沢 与吉	横沢 宣行	横沢 正明	横沢 まつ

救世大觀 祝 音の落慶

浦和市	大田区	三鷹市	川越市	川里村	行田市	世田谷区	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
山本博男	古筆丈夫	原藤春雄	会川達雄	滝沢秀夫	木村繁次郎	木村信	上野広治	白井一郎	小林英次郎	平野金次郎	柴田務	永沢敏男	甲賀寿男	矢島重五郎	深野文吉		
〃	〃	名栗村	幸手町	〃	入間市	所沢市	〃	清水市	豊島区	中央区	練馬区	〃	浦和市	世田谷区	三鷹市		
岡部敏	町田英二	鈴木喜市	三ツ林弥太郎	衆議院議員 杉山定太郎	杉山チエン 株式会社	平仙レース 山崎操	松田承風	松田江畔	西山秀吉	代表 前田増三 蛇の目不動産(株)	白井喜三郎	島田森雄	杉山義喜	今津政雄	堂城泰男		
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	名栗村
新鉱工業株式会社	町田一男	浅見康夫	大久保義雄	原田久好	平沼清儀	加藤春松	岡部敏	町田兵太郎	佐野正助	岡部恒治	浅見福太郎	町田英二	町田真之亮	岡部千三	鋼管鉱業 武蔵野鉱業所		

救世大観 祝 音の落慶

狭山市	所沢市	小平市	北区	所沢市	神奈川県	中野区	世田谷区	渋谷区	千代田区	文京区	横浜市	千葉県	杉並区	中央区
稲葉	大西	南方	清水	斉藤	小川	大竹	松田	渡辺	株式会社 和風堂	島田	五十嵐	桜沢	谷村	升金
実清	清	皓	一夫	長寿	義嘉	勝弥	俊平	綱雄	風堂	つね子	奈美	もと	薫	照恵
川越市	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	中央区	豊島区	新宿区	〃	〃	兵庫県
染谷	秋田	飯塚	榊野	井上	荒川	中島	岩本	工藤	下村	佐野	石村	石原	郡司	郡司
清四郎	新三	由利	明	千寿	安正	操	光一	侃	弥一	友二	幸一郎	易	みはる	進
志木市	毛呂山町	熊谷市	国分寺市	川越市	飯能市	浦和市	大宮市	北本町	朝霞市	熊谷市	大宮市	蕨市	嵐山町	浦和市
宮岡	浅野	神庭	今泉	川崎	宿谷	青木	大山	井野	武田	奈雲	吉田	磯野	簾藤	西川
猪夫	洋	清	忠男	俊也	文平	一栄	七郎	宏	正三	竹雄	守生	昶	正雄	裕夫

救世大觀 音の落慶

市川市	浦和市	保谷町	川里村	吉見村	練馬区	入間市	目黒区	世田谷区	"	"	"	千代田区	中野区	練馬区	千代田区	
原隆	中村善行	戸塚卓男	滝沢弘	大野陽之助	清水喜久雄	川島源次郎	広住温	前田安彦	富士倉庫運輸社長	作田徹也	石川芳雄	磯井藏	佐藤征捷	島田竜郎	山下照夫	平凡社社長 下中邦彦
"	"	豊島区	世田谷区	渋谷区	入間市	"	飯能市	坂戸町	大阪市	熊谷市	川越市	浦和市	墨田区	大宮市	川越市	
松浦松太郎	宮内巖	小島正治郎	木梨静野 <small>西武鉄道(株)</small>	山中竜洵	ブデリスト社 繁田甚三郎	平沼弘巳	平沼玉枝	原次郎	北二郎 <small>武州瓦斯(株)</small>	阪和興業(株) 鯨井文雄	福田増太郎	岡田亮治	山野辺行也	網野久一	小島俊雄	
"	"	横浜市	"	世田谷区	"	北区	"	"	"	"	名栗村	"	"	"	"	
橋本良之	高橋延寿	内藤洽	小佐野定彦	小佐野郷子	遠山栄治	純実会	早稲田実業学校 原田亀二郎	觀世音センター 株式会社	石井勲	岡部元治	鳥居觀光株式会社	長谷川正治	平山正文	宮下仁	馬場定治	

救世大観 祝 音の落慶

練馬区	渋谷区	目黒区	豊島区	新宿区	"	"	"	大田区	"	"	世田谷区	"	"	"	"
山下	黒沢	若林	後藤	野方	鳥海	村田	小西	藤塚	柴田	野村	神山	岩瀬	金子	渋谷	済間
勉	長典	千夏	輝明	武俊	豊俊	慶一	合三	義正	正光	真弓	二郎	章	光利	正二	袈裟俊
"	"	千葉県	富士見町	飯能市	鴻巣市	"	川口市	大宮市	町田市	立川市	小金井市	東村山市	北区	足立区	板橋区
三谷	黒沢	山田	三村	金子	吉田	秋山	田口	山崎	高橋	三浦	平良	前原	正部家	岩田	山本
良彦	宏国	耕作	信篤	茂	大成	守	力	浩	正之	惣市	涉	章	三長	政明	清
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	狭山市	富士見町	"	入間市	群馬県	"
岡野	岸石炭店	小高はな	小高志げ	小高金三	小沢一郎	多加谷米	多加谷乙未	原田章一	小沢寿太郎	平山実	渋谷兼吉	萩野真吾	石井百蔵	福田正一	秋田昌彦

救世大観 音の落慶

〃	〃	〃	板橋区	飯能市	名栗村	〃	川越市	東松山市	板橋区	〃	〃	狭山市	〃	〃	〃
桜井俊昭	秋葉幸	西野未吉	大野さき	桑田真砂	佐野恒雄	藤野達也	松本豊	長島振作	清水正夫	井上茂司	正木章治	井上信一	井上竹吉	青田義雄	寺井清次
飯能市	横浜市	荒川区	練馬区	小笠原市	板橋区	練馬区	大宮市	川口市	〃	新井市	〃	〃	〃	〃	〃
中島政男	岡本伊佐男	神田八束	桑田紘行	遠山和義	遠山辰雄	木戸かつ	鶴見いな	岡田健児	佐藤久男	榎本忠興	榎本誠二郎	田中万太郎	榎本ミヤ子	榎本定義	山崎定義
武蔵野市	〃	杉並区	〃	小金井市	市川市	世田谷区	新宿区	杉並区	板橋区	東村山市	〃	新宿区	〃	〃	中野区
杵屋弥三稲	森田紗千子	相島百信	鈴木文子	鈴木重雄	増田喜八郎	柏木大博	山本豊吉	東京和裁文化学園	ビレーン園	町田清吉	丸東染色工場	小倉染芸	竹内直孝	武田規公子	武田茂男

救世大観 音の落慶

浦和市	練馬区	鎌倉市	千代田区	川口市	川口市	中野区	板橋区	杉並区	板橋区	練馬区	中野区	所沢市	渋谷区		
藤沢	鈴木梅子	鈴木真太郎	広瀬正子	広瀬元夫	永瀬一郎	高橋司郎	竹越梅子	出羽敏雄	塚田節子	佐藤篤子	小川弥吉	五十島敬子	所沢はっえ	打木文	田沼登
飯能市	入間市	日高町	大宮市	川越市	川島村	坂戸町	鴻巣市	飯能市	上尾市	大宮市	東松山市	飯能市	〃	〃	
山川邦雄	大矢浩平	大川戸要吉	落合隆二	榎本賢吉	斉藤賢吉	黒瀬滝治	森正木	加藤育三	柴崎昌夫	兵頭陸雄	横溝喜久雄	千原吉元	梶谷真一	藤沢秀夫	藤沢やす子
〃	与野市	上尾市	浦和市	大宮市	浦和市	川口市	大宮市	吉見村	本庄市	熊谷市	深谷市	熊谷市	吹上町	浦和市	
矢島繁	稲村喜美男	丸山久蔵	加藤洋治	川野博通	佐藤昇治	中村正夫	小林文久	黒田明	新井和明	田口次作	橋本正勝	富田邦男	進藤俊典	根岸栄一	比留間豊夫

救世大觀 音の落慶

宮代町	〃	大宮市	〃	鴻巣市	戸田市	浦和市	鳩ヶ谷市	上尾市	新宿区	板橋区	浦和市	行田市	吉見村	大宮市	栗橋町
田中弘次	間庭正二	小島武夫	久保田真喜治	久保田忠治	細井幹夫	黒沢洋一	宍戸忠治	大川長信	山沢隆一	天海秀夫	星野謙三	島田友五郎	大山伯之	常見武男	白井一郎
〃	〃	与野市	吹上町	熊谷市	〃	大宮市	浦和市	川越市	熊谷市	大宮市	与野市	飯能市	菖蒲町	〃	白岡町
井上正雄	正木三郎	森幹一	稻沢吉春	手島昭晃	小菅山博	広田健司	後藤光夫	金野裕	井田四良夫	砂川誠也	岡部政雄	平松正吉	松本晃	松本義勝	斉藤幹雄
騎西町	日高町	熊谷市	北川辺村	行田市	菖蒲町	加須市	上尾市	羽生市	川越市	吉見村	毛呂山町	嵐山町	行田市	熊谷市	〃
浜野義文	嶋田保	三上仲三郎	永塚正夫	渋沢修	福井精治	島崎隆雄	若林二郎	岡田孝徳	関賢寿	古杉孝行	吉田義孝	馬場恒次	松岡潔	佐藤寿夫	井上正巳

救世大觀 祝 音の落慶

熊谷市	加須市	白岡町	深谷市	本庄市	羽生市	熊谷市	大田市	〃	〃	熊谷市	東松山市	加須市	行田市	加須市	〃
福原政明	酒井吉彦	大久保良一	綿貫富雄	清水光雄	清水栄	石黒光治	木村泰久	茂木晋二	斉藤辰雄	猪野一夫	栗原利男	加藤清正	諸貫忠久	新井洋	浜野ふく
〃	大宮市	入間市	〃	所沢市	大宮市	北本町	熊谷市	北本町	東松山市	上尾市	秩父市	野上町	寄居町	熊谷市	児玉町
望月盛隆	武田安弘	小沢華一	吉田猛	藤野隆	小池康夫	芳村寿久	石田征司	小沢俊勝	新井徳治	大滝孝	斉藤清	小林博	保泉敏夫	山口素	茂木俊雄
浦和市	大宮市	浦和市	〃	新座市	草加市	蓮田町	草加市	〃	浦和市	岩槻市	浦和市	福岡町	岩槻市	飯能市	〃
青山富治	黒須達児	花木孝	大久保悦子	大久保健治郎	渡辺友次	新井義男	関留義	平石博勇	小沢恒介	石田照男	吉田明德	安田正吉	古田勝蔵	高野昌保	工藤勝彦

救世大觀 音の落慶

与野市	上尾市	浦和市	北本町	熊谷市	浦和市	三芳町	鴻巣市	川口市	蕨市	蕨市	浦和市	熊谷市	北本町	川口市	行田市
田中隆司	黒白享幸	高野貞夫	新井忠一	近藤七郎	見富一貢	岡部亮介	村田征二	小岡子利行	萩原工業株式会社	山崎一由	宮野次孝	長谷川栄二	梅本福雄	高橋和夫	榎本富郎
与野市	品川区	東松山市	川越市	与野市	浦和市	大宮市	新宿区	川口市	飯能市	岩槻市	与野市	与野市	大宮市	大宮市	大宮市
堀木栄二	田嶋勲	吉田憲太郎	榊林伝蔵	柴山新之助	沖田忠	室田由雄 <small>大栄管理(株)</small>	斎藤善政	桐木光三	大柴不動産(株)	真柄勇	吉田兵蔵	松本功	天野富雄	大邦商事	洗井モーターズ
与野市	新宿区	荒川区	与野市	与野市	与野市	与野市	与野市	目黒区	宇都宮市	目黒区	豊島区	目黒区	中野区	小平市	大宮市
竹村勝	竹村吉右衛門 <small>安田生命保険相互会社</small>	北沢隆吉	桜井五薫	道城正三	渡辺義之	相原米蔵	大場富士雄	若林五郎	神山義男	阿部正雄	西島達夫	今井豊子	浜崎国男	児玉雄吉	神田武

救世大観 音の落慶

中央区	練馬区	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	新宿区		
蛇の目ミシン工業株式会社	平沼杉之助	松崎悦太郎	望月貞夫	原慶邦	富田一郎	戸田濟	佐々木征一	加藤和男	青木新隆	尾崎隆	那和主計	水野衛夫	山川紗歌江	竹村京子	竹村卓二
八王子市	鎌倉市	三鷹市	八王子市	新宿区	杉並区	川崎市	国分寺市	鴻巣市	板橋区	国立市	小金井市	桜ヶ丘	小金井市	小田原市	青梅市
蛇の目電機株式会社	奥村正巳	斉藤文平	田中義一	富田澄	田宮由道	斉藤悟	小宮山守一	内島達爾	長田正光	中村静夫	丸山幸一	広谷豊蔵	高木正一	前田増三	嶋田卓弥
文京区	飯能市	岩槻市	鎌倉市	川口市	〃	〃	〃	〃	〃	〃	中央区	山梨県	東大阪市	小金井市	〃
伊東祐義	本橋進	中田鞞男	船田栄	山口政志	武川文男	山崎文男	金子光助	榎原惣一	山口友作	武州商事(株)	蛇の目電算センター	蛇の目不動産株式会社	蛇の目金属工業株式会社	三光ミシン工業株式会社	蛇の目精密工業株式会社

救世大観 祝 音の落慶

中央区	浦和市	北本町	府中市	"	"	港区	日高町	川口市	"	飯能市	兵庫県	"	狭山市	世田谷区	飯能市
山根春衛	船橋へルスセンター 中野政孝	岡田功	山野辺宗鳳	日永清	新妻治郎	伊藤正雄	㈱新堀製作所	中村福太郎	柳内貞雄	田中政三	山田晁	青木恒雄	青木佐四郎	西沢はる	宿谷益三
川口市	大宮市	与野市	"	"	"	"	大宮市	"	"	"	"	"	"	"	"
大野元美	川口市長 左伴定広	天野松之助	秋山清	柏倉寛一郎	岩井栄一	岩井栄	東角井光臣	山田喜志夫	二宮謙三	古沢清久	高山重郎	松本四郎	田中敏	丹沢章浩	清水富雄
"	武蔵野市	新宿区	千代田区	中央区	新宿区	"	中央区	"	"	武蔵野市	大宮市	台東区	"	"	"
宮沢正愛	吉田博宣	田畑米蔵	和田豊	伊藤広司	鈴木徳蔵	桃沢白吉	宮崎甚左	鈴木喜久蔵	桃沢白吉 支配人	名店会長 名沢富夫 (名店会館)社長	川守田実 オリンピックセンター	中西士朗	寺門清志	駒場久雄	

救世大観 音の落慶

大 市	杉並区	神奈川県	所沢市	杉並区	〃	吉祥寺	新宿区	目黒区	吉祥寺	渋谷区	中央区	〃	渋谷区	〃	〃
岡田敬司	高橋一郎	曾我五郎太	服部雄次	服部雄太郎 <small>三信工業特</small>	植月忠雄	三次きみ	望月継吉	須藤広栄	米倉広人	高山光洋	東条達弥	佐々木英造	岩城二郎	京極源三郎	大野勝二
神奈川県	八王子市	町田市	昭島市	府中市	調布市	〃	練馬区	足立区	〃	〃	〃	江戸川区	北区	新宿区	〃
渡部敏之	打味崇	塩治寛次	紅林邦雄	山本一雄	白山暁	後藤英雄	宇佐美誠	清水雄治	宮木亨	倉林金蔵	麦倉忠彦	青木平吉	堀豊泰	本木幹彦	安藤秀三郎
川越市	朝霞市	川口市	文京区	与野市	港区	練馬区	静岡市	浦和市	〃	入間市	新宿区	市川市	三郷町	飯能市	入間市
磯貝勝之	青田正雄	小林一郎	松本元	福田忠秀	加藤真一	井野雅史	大嶽孝夫	稲村坦元	野口丈夫	東上液化ガス	北川教全	中富男	武石次男	小林頼四	鈴木和男

救世大観 祝 音の落慶

中央区	文京区	松戸市	渋谷区	品川区	〃	〃	世田谷区	川口市	北区	世田谷区	横浜市	新宿区	飯能市	日高町	大宮市
右近保太郎	内藤豊次	相台宗次郎	竹井博友	重宗雄三	沢田政広	神谷志津江	神谷正太郎	大泉寛三	大川鉄雄	小佐野賢治	岩本勝俊	石橋湛山	黒田利平	後藤平吉	蓮見健樹
大阪府	大阪市	練馬区	世田谷区	〃	新宿区	〃	港区	北区	奥多摩町	鎌倉市	〃	中央区	与野市	千代田区	川越市
松下幸之助	住友銀行	福士勝男	稲山嘉寛	柿原康治	黒川倉好	黒川武雄	一万田尚登	下世古三雄	木村源兵衛	小糸源六郎	宮沢庚子生	山名酒喜男	小林英三	飯野海運	山崎嘉七
御申込順により掲載させていただきます。	千代田区	世田谷区	大宮市	武蔵野市	飯能市	川口市	西宮市	京都市	〃	〃	〃	〃	〃	〃	大阪市
	秩父セメント	山崎まりえ	平沼康彦	内田さつき	飯能観光バス	飯塚孝司	八馬真治	木村寅一	多聞酒造	南水	大阪造船所	青島	神林正教	武田長兵衛	夏川鉄之助

を折伏すべし」であります。

人の心は不思議なもので、喜びを感じたかと思うと悲しくなる。一寸したことで腹が立つ、食べたくなったり、睡やすみくなる、見たくなる、ほめたり、けなしたり、実に変化します。ですから出来る限り注意して、悪い方に心が動かないようにすべきです。

およそ仏教では心を二色に説いています。清浄心と染汚心せんごうしんとです。清浄の方を「自性清浄心」といって、本心本性とも言い、仏性とも申します。染汚心は煩惱心と申し、常に煩悶に苦しませ、人生を邪道おとに墜おとしいれるもので、この悪い心を折伏——放逐——せよとお誠にになったものです。

人の本性（本心）は清浄無垢のものです。この善心を染汚するものがあり、世尊は「五根の賊ぞう」と仰せられました。わかり易く説明いたしましたしょう。

五根とは、眼、耳、鼻、舌、身、の五つで、さまざまな誘惑物を受けこんで、染汚心に送り込もうとするものです。根と申しています。木の根にたとえたのですが、善くも悪くも働くものです。ですからお教のなかに、五根は心をその主となすとしています。ですから、染汚心は実に恐しいもので、毒蛇悪獸の如くお互いの本心の仏となるべき命を奪ってしまします。

ゆえに恐しい煩惱を折伏するものは、仏法信心の力よりほかにはないので、信仰により安心快樂の活計を得られますよう希望いたします。

(十三) 修養八条訓

この八条訓は或人の希望により日常の修養訓として書き与えたもので、修養訓として、すべてを言いつくしているとは申せないでしょうが、この八条を精神のうちにもつていれば、枝末の行為は自ら美しく発揚されるものです。

第一、人は常に心に不足を持つまじきこと。

仏教ではこの世を娑婆しあはといい、勘忍土のことです。

人は何事にも心のままを望みますが、とても満足出来ないのがこの世の定めとあきらめて、不足の心を持たないよう辛抱すべきです。

第二、徒らに腹を立つまじきこと。

勘忍の力の足りない人は、不平が多く、自分の心をおさえられない恥しい振舞です。人の本心は平和なものです。腹を立てると、やがてわが身をくつがえすものと合点して勘忍が大切です。

第三、益なき我慢を通すまじきこと。

人は正直で素直であれば、天地の道にかんって、神仏のみ心と合体します。だが、剛情我慢で意地張り根

性の強い者は、神仏のみ心にそむいて、憎しみを受け同情を失い、独りで苦しむだけです。

第四、蔭日向ある行ないをすまじきこと。

日常の行ないや仕事に表裏のある人は、人の信用を失って、遂には自滅します。人の目には見えなと思ふようなことでも、神仏の眼は見透しであると信じて、人の前ばかり飾るような行ないは慎しむべきです。

第五、すべて物事に後と先とを考うべし。

すべての物事には出来てくる本もとがあります。仏教での因果のことで、何事も油断してはなりません。若い時の怠りが晩年の不仕合せとなり、人に親切を施せば何時か人から親切にされます。従って目先のことばかり考えず、毎日の行ないが未来世の果報をつくるのですから、良い種子をまく心がまえが肝心です。

第六、常に己れの及ばざることを顧みるべし。

少しでも自分にすぐれた所があると、偉がるものですが、大変な心得ちがいで、上には上があることを知るべきです。氣位を高くするから、不満に思い、腹を立て、いつも人を馬鹿にしたくなり、結局わが身に、災いを招く。自分の及ばざるをよく知ることです。

第七、日々の勤は御恩報謝と心得べし。

人のために働くと思えば、相手の礼の言いよう、報酬の少いことなどに腹が立ち、亦自分のために働くと思えば、怠けたくもなります。併し吾々がこの世に居る限りどんな人からも受けている四恩があります。父母、国王、世界万物、三宝師長、の恩です。その御恩報謝であると思えば、愉快に働いて暮らせませす。

第八、天地の間に神仏いますことを疑うべからず。神仏を信ずるのが宗教心にて、人の偽らない心の底の現われであります。何事にも「誠」を土台にしないと成功できません。神仏を敬う觀念を失ってはいけません。そしてひいては祖先を敬い、親を大切にしなければならぬという美しい国民道徳も現われてきます。

以上八条の教訓は、簡約なものなれど、其の意味をつかんでおれば、万事過失なく、人としての価値を、身心の上に全う出来るにちがいありません。

寺院用具
仏壇仏具
御宮神具

株式会社

浜田商店

東京都台東区寿二一〇―九
電話八四一―四九六五(代)



西遊記（其の十五）

岡部 千三

惠岸行者

観音さまは、悟空があわてていて、めちやくちゃなことを云うのもよく聞きとられて、

「悟空よ、そんなにあわてることはない、その流沙河の大入道は、このわたしのたのみで、経本をとりにく者のお供をするやくそくをしている者だ。法師に向つて手あらなまねをするわけがないが、おかしいぞ、そちがさきに、いたずらしたのであるう。」

「いえいえ、ちがいますよ、あちらが、かかつてきたんです。」と悟空のやつ、むきになって、「たしかに手むかいしています。今だって、八戒と川の中でたたかっています。」

「悟空……そちは、大入道に、法師のことを報告したのか。」

「いえ話しません。あのようなわけものに、お師匠さまのことを云ったって、わかるはずはないと思つた

し、そんなことより、あんなやつは早くやつつけた方がよいと思つたからです。」

「それがいけない。法師のことを話せば、おとなしくなるはずだが、あわてもののそちではなあ……だめであるう。」とおっしゃって、観音さまは、すぐに惠岸行者をよびよせた。

「このひょうたんをもって、流沙河へいってくれ。川に向つて、「悟浄」と呼べば、大入道が出てくるから、三蔵法師にあわせてくれ、やつは、たくさんされこうべをもっているから、それを、じゅずつなぎにして、そのまん中にこのひょうたんをいれて、舟をつくりなさい。舟に法師をのせて、川をわたりなさい。」

「はい、わかりました、ではたしかに。」

惠岸行者は、雲にのつて、すぐさま流沙河へと、いそいだ。やがて川岸につくが早い、

「悟浄」と川にむかつて大声をかけると、川の中から波をかきわけて、大入道が、にゅつと首をつき出した。

「観音さまからのおことばをよくきくの、だ、あれにおいでのお方は、経文をとりにかれる法師さまだぞ、じゃまをしてはならぬぞ。」

三蔵法師の方を指さして云つた。法師のそばには、二日も休みなく戦いつづけた八戒が、もうつかれた顔

をして、はあはあくるしい息づかいでした。

大入道は、よわっている八戒をゆびさして、

「惠岸さま、そんなこととはつゆしりませんでした。

そのいのししのばけものは、わたしに対して、らんぼ

うするばかりで、なにも話してくれなかつたです。本

当にあきれた者ですよ。」とおこつて云うのだった。

「お前を見ちがえていたのだよ。その者はな、猪八戒

と申し、又こちらの猿のようなやつを孫悟空と云つて、

法師のともをして、天竺へ行く者で、二人ともおまえ

の仲間なのだ、これからは、なかよくするのだぞ。」

「それなら、もうこのさきけんかなどしません。」

大入道は三蔵法師の前にぬかづいて云つた。

「沙悟浄と申します、観音さまからいただいた名前で

す。」

と云つて、じろりと悟空と、八戒の方をにらんだ。

「三蔵法師さま、このわたしを大入道などと云うやつ

を、しかつてください。」

「うん、よし、わかつた、沙悟浄とはよい名だ。悟空

も八戒も、沙悟浄の名をよくおぼえただろうな。」

「はい、よくわかりました。すると、ただの大入道で

なくて、沙悟浄ですか。」

「大入道の沙悟浄ですね、しっかりおぼえました。」

悟空と八戒は、大入道と云うところを、わざと、大きな声してくり返した。

「大入道だけはよけいだい。」と沙悟浄は、ぷりぷりしておこつていた。

「わしはな、お前らとは、身分がちよつとちがうでな、これでも、以前は天上で、玉帝さまにつかえていたのだ、ちよつとしたまちがいをやらかしたのがもので、

下界へおろされ、このようなすがたにはなつたが、法師さまのおともができると思えば、気もはればれる

のよ。どうだ、悟空と八戒、わしはえらいだろう。」

「りっぱ、りっぱ、だが、今ここで、じまんはやめてもらいたい。」と悟空がまけてはいない。

「天上においでになつたのは、お前さんだけではごぞいませんよだ、このおれさまも、齊天大聖の位までの

ぼつたものだし、八戒も、天上の天の川をまもつていた大将だったのだぞ。」

「そうともよ、悟空のきょうだいのいうとおりだ。」と八戒も、胸をそらして目をむいた。

「おなじところは、そればかりじゃないよ、天上でわるいことをして、下界へおろされたところも、よくに

ているぞ。だからよ、これからは、みんなでおしようさまによくはたらい、ぶじに経文をいただけるよ

うにつとめようではないか。」と悟空が、いかにももつともらしく云った。それを八戒も、沙悟浄もきいてしだいにもおちついたらしく、

「そうだ、三人がきょうだいだ」と八戒も云った。

三人が仲直りをした様を見た惠岸行者は、はじめてにっこりとした。

「では法師のために、舟をつくりましょう。」

行者は悟空のもっているされこうべをつなぎあわせ、まん中にひょうたんをいれて、水にうかべた。

「法師さま、どうぞおのりください。」と惠岸行者がうながすと、三蔵法師は

「おかげで、川がわたれます。いろいろとはねおりをかけました。」

法師は行者がさきになってこしらえてくれた舟にのりこむと、右と左を八戒と悟浄がまもり、悟空は白馬をひいてあとにしたがった。

惠岸行者は、それから空にのぼり、雲の上から、舟のようすをながめていた。

舟は、ゆらりゆらりとすすんで、やがて、かなたの岸についた。

「法師さらばです。」

惠岸行者は、小さい声で云いながら、ひょうたんを

とり、されこうべの舟を、ぶぶつと吹いたかと思うとたちまち、その舟は、霧のように消えてしまった。

「さあ、いこう、天竺まで、」

三蔵法師は足をふみしめながら、三人のでしたちにむかって云った。

遠い空に、白い雲が浮んでいた。天竺はまだその雲よりも、はるかに遠くにあった。



三蔵法師をとりまたようにして、悟浄悟空、八戒は、やっとおちつきをとりもどして、足もとにせまってくる、あやしげな、そしてけんそな道をふみしめながら、前方を見上げた。後方をふりむいたり、時々法師の顔いろをうかがうように、おたがいが注意の目をもって、歩いていった。

万 寿 山

經文をとりにかく旅は、くるしいうえに、つらいことがつづいた。

野っ原や、山中にねたり、やぶれ寺に、雨風をふせいだりして、三藏法師と三人のてしは、たがいに力を合せて、天竺さして旅をつづけた。

からだもへとへとにつかれたが、もっとつらいのは食物がたりないことで、四人のうち、一番くいしん坊の八戒は、時々ぐうぐうと腹をならしながら、食べることだけ考えていた。

その八戒が、「やあ、ありがたいぞ」といきなり大声をあげた。それはむこうに、立派な寺を見つけたからで、そこには沢山の食物があるだろうと思つたからである。

「さあおししょうさま、急ぎましょう。今夜は、腹いっぱいたべて、ぐっすりねむることができます。」

まだたどりつかないうちから、八戒は大にこにこである。

「またはじまったぞ、寺はあつても、人が住んでいるかどうかわからない。又いたとしても、その人がいい人かわるいやつか、わからないぞ。八戒、そんなによ

ろこぶのはまだ早い。」

悟空は八戒をしかつた。

「きょうだい、心配するな。こういうところに住む人は、必ずいい人にきまつているさ。」と云いながら、八戒は、先に立つて、寺の門前へいそいでいった。

その寺は五莊観と称し、うしろの山は万寿山といった。そして寺には仙人が住んでいた。

寺は、ただしんと静まり返つていて、庭に二人の子どもが遊ぶばんをしていた。

三藏法師をみると、すぐに

「あなたは、天竺へ經文をとりに行かれるお方ではありませんか。」とたずねた。

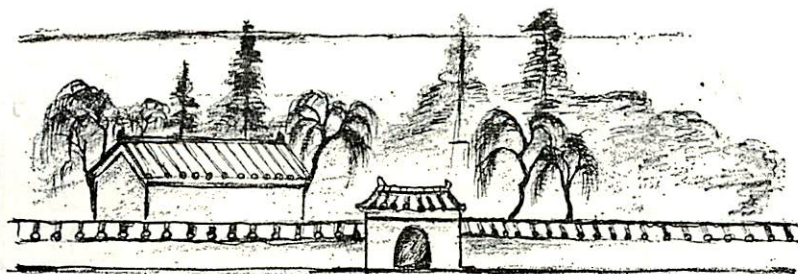
「そうだよ。そうだよ、その通りだ。」

法師がまだ何も云わないさきに、八戒が、口をつき出して云つた。

「やっぱりそうでしたか、ではどうぞおはいりください。主人の鎮元子は、いまるすですが、あなた達が、いらっしゃつたら、おまちいたたくようと、云つておられました。」

二人の子供は、ていねいにあいさつして、法師達を寺のうちへあんないしました。

「やれやれ、やつと助かつた、それにしてもつかれた



腹もへった。」

どかりと負った荷物をおろした八戒は、腹をなでながら、何を食べさせてくれるかと、それがたのしみのようであるが、何にも出してくれないので、そろそろほおをふくらませてきた。

悟空も八戒も、つきつきに同じ顔つきになってきた。「みんな行儀のわるいことだ、これでは子供達にわらわれることだろう。」

法師は、でし達のようにすをはずかしく思うのであった。そこで三人に用じを云いつけた。

「悟空と、悟浄よ、外へいって馬と荷物の番をしてくれ、八戒は、米を出して、ご飯のしたくをしないさい。」
「でもおししょうさま、そ

んなことをしなくとも、少したてば、ごちそうがでるんではないですか。」と八戒は、口をとがらせて、さもめんどうくさそうに云った。

「なにを云うのじゃ、主人がするすだと云うのではないか、ごちそうなど、あてにしてはなりません。自分達のことは、自分達でしなければならぬ。人にめいわくをかけないようにと、常日頃から教えているのは、このことじゃ。」

「はい、はい、わかりました。」

八戒は、荷物から米を出して、食事の仕度にかかった。悟空と悟浄は外へ出て、寺の中には、法師ひとりになった。すると、二人の子供は、法師のそばへよってきて、ほかの三人にはきこえないように、小さい声でそつとささやいた。

「法師さま、主人の云いつけで、あなただけにさしあげるものがございます。」そう云ってちょこちょこ、でていった。

やがて「これでございます。」と朱ぬりの盆をさし出した。

「あっ」……………ひと目みて、法師はびっくりぎょうてん。目を丸くして声をたては。どうみても生れたばかりの赤んぼうである。
(次号につづく)



終わった夏の行事

写経塔の地鎮祭

六月十七日午前十時から、三信工業の請負により、救世大観音の手前、左の景勝地、面白岩に写経塔が建立されるので、村社の宮司枝久保嘉福氏によって、おごそかに地鎮祭が執行されました。梅雨晴のよい天気にくぐまれて、祭場近くそびえ立つ、三蔵塔と、完成急ぐ救世大観音の偉容が、陽を浴びて美しく、眺められました。

あじさい会

七月十日、習字を学ぶ村内の人達二十名程が庫裡に集合されて、園内のあじさいに見とれながら毛筆練習をしました。この会をあじさい会と名づけました。

名栗川プール開設

七月十七日、観音センターが毎年特設するもので、名栗川の清流をせき止めて出来た、約三千平方メートルの大プールです。毎年これをたのしみに、夏休みを利用しての来山者や、来館者が多数ありますが、この施設によって家族もたのしく、そして健全な生活指導

がなされたことは、実に意義があったと思います。

流灯法要会

八月十六日、名栗地方のお盆なので、流灯法要のお申し込みをいただいた方々の先祖代々、又は戒名を灯ろうにしたため、本堂にお供えして、午後五時から、三人の僧侶によって、法要を営みました。千灯に及ぶ申し込みを観音様の前で読み上げるのですから、暑中の折から大変です。

参列された方々も熱心にこの状況を汗を拭きながら見入っておられました。法要は約一時間二十分程かかりました。この頃夕立模様の空から、ぽつり、ぽつりと雨が降って来ましたが、灯ろうは河原へ運びました。そのうち本降りとなったので右往左往一時大変でしたが、小やみになったので、無事に流灯を果しました。このような行事はいつ頃から始まったのでしょうか。このような行事はいつ頃から始まったのでしょうか。この本によると、陰暦七月十六日に、河海などに流す、とあって、長崎、丹後の宮津等が名高いそうです。

みなぎれる 石狩川や 流灯会 阿 蘇

水に影 引いて流灯 つぎけり 筑 波

以上のような句があります。

当山のこの行事も年々、盛大になりましたことは、広く篤信者各位のご協力の賜と、厚く感謝いたします。

花火大会

流灯が開始されると、観世音センター下の川原から、まぢかまえていたように、大小の花火が、つきつきとうち上げられ、川に浮ぶ灯ろうと、空に咲く花火の色に、人の影が川岸に美しくてらし出されてみごとでした。すっかり雨も止んで全部の流灯が終るころ、川を渡して仕掛けられた、仕掛花火に火がつけられると、みるみるうちに川原一面の花、火の滝となって、やがて早打ちとなって、最後は大花園を展開しました。尚花火は次ぎ次ぎと打ち上げられ、観衆は又ふえて来ました。

村の善男善女は勿論、村外からも……。

盆踊り大会

本堂前の広場の中央に用意された、やぐらから打ちならす大太鼓につれて、レコードによる民謡が流れて来ました。手ぐすねひいて、この時を待っていた村の若者や婦人達は、やぐらの中に大きな輪をつくって、さまたのしそうに、手振り足どりも軽々と踊りました。

そして、輪は一重から二重三重となりました。

その雰囲気につれて、センターに宿泊していた、婦人の客達も仲に混って、大衆が一体となって、踊り、その輪は又ふくらんでいきました。

やぐらの太鼓の音と、花火と、踊りはおもしろくなって、もう大衆は汗と共に熱して来ました。

盆踊り 踊りつかれて夜のふける 千昭

こんな句が出ました。

やがて最後の一声雷の花火を合図に、踊りのプログラムも完全に出し切られて、年一度のこのたのしい、行事も、無事に終わりました。

夏の来山者

五月十六日、国際興業、飯能、川越地区の従業員約百名程有間探勝と当山見学に来山されました。

六月五日、蕨市南町の大泉桂子様が、お子様の安産御礼のため、子育地藏に美しい千羽鶴を奉納されました。

六月二十日 東京の講元新妻治郎氏 来山

六月二十三日 静岡の松田江畔先生御一行三十五名来山、習字会を開催されました。

七月十八日 東京 江崎元堂先生御一行三十九名来山、見学されました。

とりぬ 第二十号 発行日 昭和四十六年十月一日

編集兼 発行人 埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音 岡部 千三

印刷所 浦和市仲町二一八—十五 武州印刷株式会社

発行所 鳥居観音 電話〇四二九七〇四名栗二七五番

白雲山

鳥居観音
観世者センター案内図



救世大観音落慶式並に壱万體観音奉安式

- と き 11月11日午前10時より
 - ところ 救世大観音に於て
 - 導師 曹洞宗管長 岩本勝俊猯下
 - 受付 三蔵塔前広場特設受付所
- 御招待状御持参の方には受付で記念品引換券をお渡し申し上げます。
- 記念品 式後ヒュッテ入口にて、お引換致します。
 - 式中行事 御詠歌奉詠、稚児行列、花火打ち上げ。
 - お願い 当日は混雑が予想されますので、特別御招待者及び壱万體観音奉安者御招待に限ります故一般の方の入山は勝手乍ら翌日以降に御願いたします。

新年祈禱会にご参加のご案内

年々元旦祈禱会も盛大になりました。御礼申します。本年も計画いたしましたので、ご協力ください。

○願意 家内安全、病氣平癒、安産、試験合格、商売繁昌、交通安全

○祈禱料 金五百円 千円 弐千円

○お申込 なるべく12月25日頃迄に鳥居観音事務局へ御申込みください。

千円以上の御札の方には

交通安全の御守（ステッカー）を贈呈いたします。